

「カインとアベルのささげ物」に隠されている神の真意



- (1) なにゆえに神はアベルとそのささげ物に目を留められたのか
- (2) 「正しいことを行う」とはどういうことか

ベ・レーシート

●実のところ、今回のテーマは前回のヘブル・ミドゥラーシュ例会(6/16)で取り上げようと準備していましたが、しかしどうしても核心的な部分が開かれず、そのまま放置することにしました。ところが7月に入ってから、礼拝後に子どもたちと「オール聖書探究会」という学び会を始めることになり、その最初の会のテキストをレビ記1章1節としました。そこには「主はモーセを呼び寄せ、会見の天幕から彼に告げて仰せられた。」とあります。この箇所には三つのヘブル動詞、「呼び寄せる」「告げる」「仰せられる」が登場します。最初の動詞の「呼び寄せる」と訳されたヘブル語は「カーラー」(קָרָא)で、ヘブル語聖書のレビ記のタイトルは「ヴァイクラー」(「そして(主は)呼んだ」קָרָא וַיְקָרָא)となっています。まさにレビ記は、神がモーセを呼び寄せて、神が一方向的に語っている書です。モーセは語る(話す)ことは苦手であっても、聞くことにおいては特別な能力が与えられていたことが分かります。

●「カーラー」に続く二つの動詞は「告げる」と「仰せられる」という、実に意味の似た言葉が続いています。なぜこの二つの言葉が重ねられているのでしょうか。そこで第一回目の「オール聖書探究会」は、「告げて、仰せられた」が意味することは何かを考える会となりました。そこで、そこに使われているヘブル語を子どもたちに調べさせると、「告げて」は「ダーヴァル」(דָּבַר)、そして「仰せられた」は「アーマル」(אָמַר)だと分かりました。新改訳は「告げて仰せられた」と訳していますが、新共同訳はなぜか「仰せになった」としか訳していません。2節にも同様に「イスラエル人に告げて言え」とありますから、省略したのかも知れませんが、1節には(原文では)二つの動詞が置かれているのです。

●ちなみに、後者の「仰せられた」はヘブル語動詞の中では最も多く使われています。その使用頻度数は5,308回です。「ダーヴァル」(告げる)の使用頻度数は1,137回で、「アーマル」(仰せられる)に比べるとその五分の一です。「告げて仰せられた」というふうに、「告げる」と「仰せられる」が結びついて用いられているのはモーセ五書が圧倒的に多いのですが、その違いは何なのかが問題です。一つ一つの箇所を丹念に調べたわけではありませんが、単に「仰せさせる」というのは、あることを伝達するという意味であり、それに「告げる」が入ると、とても大切な、メッセージ性の強い内容が語られていることを意味しているように思います。とすれば、レビ記1章1節の「告げて仰せられた」は、これから語られる内容がきわめて重要な事柄だと身構えさせます。そのようにして2節以降を見ると、「もし、あなたがたが主にささげ物をささ

げるときは、だれでも、家畜の中から牛か羊をそのささげ物としてささげなければならない」と語られます。そして、最初のささげ物として挙げられているのが「全焼のいけにえ」なのです。「ささげ物」に関する神の啓示の順序は重要なものが先に来ます。このことは幕屋の啓示にも言えますが、主へのささげ物についても同様です。ささげ物の場合、その順序は「全焼のいけにえ」「穀物のささげ物」「和解のいけにえ」「罪のためのいけにえ」「罪過のためのいけにえ」となっていますが、ささげ物のうち最も重要なのは「全焼のいけにえ」です。

●祭壇にささげられる「いけにえ」の歴史を概観するならば、幕屋での礼拝規定が定められる前までは、ノアにしても、アブラハムにしても、ささげ物といえば常に、「全焼のいけにえ」でした(創世記 8:20, 22:2)。おそらく、アベルがささげた物も「全焼のいけにえ」と考えられます。なぜなら、雄羊は決まって「全焼のいけにえ」となる動物だからです。ちなみに、「罪のためのいけにえ」は決まって「雄牛」か「雄やぎ」ですが、「罪過のためのいけにえ」は決まって「雄羊」です。レビ記での五つのささげ物の最初と最後が「雄羊」であるとすれば、雄羊が「ささげ物全体」を代表しているとも考えられます。このような導きの中で、「なぜ神がアベルとそのささげ物に目を留められたのか」ということに、突如、目が開かれた思いがしました。今回のミドゥラーシュの具体的な設問として、なにゆえに神がアベルとそのささげ物に目を留められたのか。そしてまた、目を留められなかったカインに対して、あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられると言われた神のことばの真意とは何かを考えてみたいと思います。

【新改訳改訂第3版】 創世記 4章 1～7節

1 人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、【主】によってひとりの男子を得た」と言った。

2 彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。

3 ある時期になって、カインは、地の作物から【主】へのささげ物を持って来たが、

4 アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。【主】はアベルとそのささげ物とに目を留められた。

5 だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。

6 そこで、【主】は、カインに仰せられた。「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。

7 あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」

【新共同訳】 創世記 4章 1～7節

1 さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。

2 彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。

3 時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。

4 アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、

5 カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。

6 主はカインに言われた。「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。

7 もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずはないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」

【バルバロ訳】

- 1 男は、妻エバを知った、彼女は身ごもってカインを生み、こう言った、「私は主のおかげで、一人の子をもうけた」。
- 2 加えて、アベルという弟も生んだ。アベルは羊飼いに、カインは地を耕す者になった。
- 3 時を経て、カインは主への供え物として地の実をささげ、
- 4 アベルも家畜の初子とその脂をささげた。主は、アベルとその供え物をご嘉納になったが
- 5 カインとその供え物はご嘉納にならなかった。カインは非常に腹立ち、うちひしがれた。
- 6 主はカインに仰せられた。「なぜ、腹を立て、うちひしずれたようすでいるのか。
- 7 おまえの行いが善かったなら、顔を上げればよいではないか。善い行いをしなかったら、悪魔という悪者がお前の門の前まできている。彼はおまえを征服しようとするが、おまえこそ彼に勝たねばなるまい」。

【中澤洽樹訳】

- 1 さて、人は妻エバを知った。エバはみごもってカインを産んだ。そして言った。「わたしはヤハウェによって男の子をもうけました」。
- 2 さらにエバは、その弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。
- 3 しばらくたって、カインは土の実りを、ささげものとしてヤハウェに持ってきた。
- 4 アベルもまた、自分の羊の初子の中からいちばん肥えたものを持ってきた。ところがヤハウェは、アベルとそのささげものに目をとめたが、
- 5 カインとそのささげものには目もくれなかった。カインはたいへんむくれて、顔を伏せた。
- 6 そこでヤハウェがカインに向かって言った。なぜむくれるのだ。どうして顔を伏せるのだ。
- 7 疾(やま)しくないなら顔をあげられるはずだ。疾しいのは、罪が門口にひそんでいて、それがおまえを促すからだ。しかし、おまえはそれを押さえねばならぬ」

1. テキストにおける語彙の注解

- 今回の本題に入る前に、テキストにおける語彙についての説明をしておきたいと思います。

【1 節】

- アダムは妻を「知った」(「ヤード」 יָדַע)ことによって、妻は「みごもり」(「ハーラー」 הָרָה)、カインを「産みました」(「ヤード」 יָלַד)。ヘブル語の「知る」は性的な交わりによる人格的關係を表わします。罪のゆえにエデンの園から追い出されたにもかかわらず、「産みの苦しみ」の経験を通して、「私は主によって男子を得た」という彼女のことばの中に、神とともに生かされている実感と喜びが言い表されています。「主によって」(「エツト・アドナイ」 אֶת־יְהוָה)という部分を、バルバロ訳は「主のおかげで」と訳しています。主からの賜物として与えられた初子(長子)であるカインを、夫とは異なる別の人(「イーシュ」 אִישׁ)として得た彼女の喜びが伝わってきます。「カイン」(קַיִן)という名前の意味を「得た、もうけた、獲た、所有する」とする解釈と、「鍛冶屋、槍」とする解釈があります(4:22)。

【2 節】

- 「アベル」という名前は「ヘヴェル」(הֶבֶל)で「空しい、はかない、息」といった意味です。なぜそのような名前がつけられたのでしょうか。確かにアベルは、兄のカインによって殺されたためにこの世においては自分の子孫を残すことのできなかつた、いわば「はかない」存在でした。また、兄のカインに対して語ら

HEBREW MIDRASH No.10

れた主のことは記されていますが、アベルに対する主の眼差しはあったとしても、彼に対する主の語りかけが一言も記されていないという事実も、彼の名前が意味していることかもしれません。とすれば、長子の地位と権利が特別に扱われていたことを暗示しているようにも見えます。長兄の場合には母の喜びが記されていますが、次男の場合はそれがありません。この相違は何なのでしょう。アベルという名前はまさに兄の陰にあった空しい存在であることを表わしているようです。にもかかわらず、アベルは信仰によって神から永遠に賞賛される者とされたというのがヘブル書の解釈です。この世においては貧しく、弱く、低く、価値のない存在とみなされている者が、天の御国においては、逆転の祝福にあずかることができるという「型」が、アベルの名前の中に啓示されているのかもしれません。

【3 節】

●カインは地の産物から、アベルは羊の群れの中から、それぞれささげ物(単数)をしています。カインとアベルの関係が、農耕民と遊牧民の幾世紀にもわたる宿怨(しゅくえん)のドラマの「原型」となっているという見方もあります。確かに興味深い視点です。しかし、神のマスタープランの視点(「御国」の視点)からのミドゥラーシュとしては不要な領域です。

【4 節】

●新改訳第二版では4節を「また、アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持ってきた」と訳していますが、改訂第3版では「自分自身で」という部分が削除されています。原文では「アベルは・・彼自身もまた(「ガム・フー」גַּם־הוּא)」となっています。つまり、兄のカインがしたので、「彼自身もまた同じように」というニュアンスです。「自分自身で」と訳されると、カインはささげ物を自分自身で持って来なかったような印象を受けてしまいかねません。実は、私もそのように理解していました。訳文によって、原文にはない誤った印象を与えてしまう一つの例です。

●「アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のもを持って来た。【主】はアベルとそのささげ物とに目を留められた」とあります。「最上のも」(「ヘレヴ」הֶלֶב)と「ささげ物」(「ミヌハー」מִנְחָה)は、いずれも単数形です。主はアベルとそのささげ物とに「目を留めた」という動詞のヘブル語は「シャーツァー」(שָׁרַץ)で、これは関心と驚きをもって「注目する」「目を注ぐ」ことを意味します。日本語でも「凝視する」「熟視する」「注視する」「黙視する」「注目する」という類語があるように、ヘブル語にも「シャーツァー」(שָׁרַץ)、その類義語として「ツァーフアー」(צָרַף)や「ナーヴァト」(נָבַט)があります。ここで重要なことは、神である主がなにゆえにアベルのささげ物に「目を留められた」かです。この点については本論で述べたいと思います。

【5 節】

●自分のささげ物に「目を留めて」もらえなかったカインは「ひどく怒り、顔を伏せた」とあります。この表現の中にカインの心情が記されています。カインにしてみれば、長子としての誇りも立場も面目も丸つぶれです。「顔を伏せた」の直訳は「顔が落ちた」です。つまり、怒り心頭で、神を拒絶している様子を表しています。妬みの矛先は神に目を留められたアベルに向けられます。妬みのゆえにアベルを殺すということ

は、悪魔自身の型です。自らの傲慢さの罪によって奈落に落とされた最高の御使いが、神の愛される人間を妬んで神から引き離すという構造が、アベルを憎んで殺したカインに反映されています。

【6 節】

●ひどく怒っているカインに対して神は彼を無視することなく、主の方からカインの怒りの真意を問いかけます。しかも「なぜ」「どうして」(いずれも「ラーンマー」**לָמָּה**)、「怒っているのか」と二度も重ねて。

【7 節】

●「あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられる。」と新改訳は訳していますが、ここは新共同訳の「もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。」の方が原文通りです。主はカインの甘えを受け入れず、むしろ「正しく行う」ことが何かを彼に問いかけています。この問いかけは、カインのみならず、この物語を聞く者に対してもなされていると信じます。「正しいこと」「正しく行う」とはどのようなことなのか問われています。これが今回のミドゥラーシュの本題です。ちなみに、ここでの「正しく行う」という動詞は「ヤータヴ」(**יָטַב**)で、これが名詞になると神の「善」(「トーヴ」**טוֹב**)を意味します。動詞の「ヤータヴ」(**יָטַב**)は、神の「御心にならう」、神の目に「美しい、好ましい」、また「(～と比べて)まさっている」という意味もあります。

●「罪」(「ハッタート」**חַטָּאת**)のことを、バルバロ訳は「悪魔という悪者」と訳しています。ここでの「悪魔という」の原語は「ローヴェーツ」(**רֹבֵץ**)で、機会を狙って「待ち伏せている者」(分詞)という意味です。尋常ではない怒りに支配されたカインに対して、主は、彼を慕い待ち伏せている者を治めるようにと忠告します。しかしカインはその忠告を無視したことによって、「待ち伏せている者」に支配されてしまったのです。

2. なにゆえに、神はアベルとそのささげ物に目を留められたのか

●アベルのささげ物が受け入れられ、カインのささげ物は受け入れられなかったということについて、これは神の不当な差別だと考える解釈もあれば、これは神の主権による区別であって、だれもこのことに関して口を挟むことはできないのだという解釈もあります。これらは両極端な解釈の例です。ただ後者のように、簡単に神の主権と片付けてしまうと、神が「目を留めた」ことと「目を留めなかった」ことの区別が何なのかを、それ以上、尋ね求めなくなってしまいます。私は、神が言われた「正しく行う」とは一体どのようなことなのか、神の「正しい」とは何なのかを、その真意を尋ね求めるべきだと考えます。なぜなら、神ご自身がそのことをカインに問いかけておられるからです。少なくとも、神が「目を留められた」ことと、「正しく行う」こと、これらは密接な関係にあるということを前提に、ミドゥラーシュしたいと思います。

(1) これまでの私の解釈

●この箇所からメッセージを語ったり、あるいは、聞いたりしたことが多いのではないかと思います。しかし、ここに記されていること、つまり、「なにゆえに、神はアベルとそのささげ物とに目を留められたのか」、神の言われる「正しいことをする」とはどういうことかと突っ込まれると、そう簡単に答えが出ないのではないかと思います。聖書刊行会から出ている「チェーン式新改訳聖書」の脚注には、「主がアベルのささげ物に目を留められたのは、ささげ物に対する彼の態度である」と記されています。カインのささげ物に主の目が留められなかったのは、「主が地の作物を嫌われたからではなく、カインのささげる態度に問題があったからである」と説明しています。おそらくこれが一般的な(あるいは福音派の)解釈ではないかと思います。果たしてこの解釈は正しいのでしょうか。主にささげ物をする上での「心」、あるいは「態度」といったことがここで問題とされているのでしょうか。

(2) ヘブル人への手紙における「アベル」のささげ物についての解釈

●ヘブル人への手紙の著者が、アベルのささげ物について次のような解釈をしています。聖書が聖書について解釈している箇所には一目置かなければなりません。それは聖書を解釈する上で基本的には正しい解釈だからです。

【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙 11章4節

信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だとあかししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています。

●「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげた」とあります。「すぐれたいけにえ」について、どんな基準で「すぐれた」としているのかと言えば、それは単なる人の「態度」や「心」の問題ではなく、「信仰によって」ということです。とすれば、ヘブル人の手紙のいう「信仰」とはどんな信仰なのでしょう。11章1節によれば、「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」とあります。

●ちなみに、この1節はユダヤ人特有の修辞法である**同義的パラレリズム**になっており、「望んでいる事がら」と「目に見えないもの」が同義、「保証する」と「確信させる」も同義です。つまり、ここで言う「信仰によって」とは、「目に見えない神の永遠の事柄に対する確信によって」と言えるのではないかと思います。その視点から、アベルのささげ物がカインのささげたものよりもすぐれていたと神が評価していると言えます。また、それによってアベルが「義人」であることの証明を得たとあります(11:4)。

●「義人」という言葉から、アベルは謙遜であり、兄のカインの方は長子という特権的地位にあぐらをかいだ傲慢さがあつたとする解釈もありますが、それは聖書が意味する「義人」の概念とは少々異なっています。むしろ、ここで意味する「義人」とは、神のご計画に対する確信を持つ人です。しかも、その神のご計画を自分の望む事柄ということの意味しているように見えます。神の「義」とは、神のご計画とみこころ、御旨

HEBREW MIDRASH No.10

と目的を悟る(=総合的に理解する)ことを意味しているのではないのでしょうか。

●このレベルにおける信仰の偉人の系譜は、アベルに始まって、エノク、ノア、アブラハム・・・へとつながっています。特にアブラハムの信仰に至っては、彼が天幕生活をしていたにもかかわらず、「堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいた」(11:10)とあります。その「都」とは神が設計し建設されるもので、この確信によってアブラハムは生きたことが記されています。私たちが、創世記に記されているアブラハムの生涯を学んだだけではこのような解釈にはなかなか至りません。その理由の一つは、私たちが神のご計画の全体像に無関心であるか、あるいは目が開かれていないためです。ヘブル人への手紙を書いた著者が、なぜアブラハムが待ち望んでいたのは「堅い基礎の上に建てられた都」であったと解釈できたのでしょうか。それは、神のご計画とみこころ、御旨と目的が「**揺り動かされない御国**」(同、12:28)を建てることにあったことを知っていたからに他なりません。これが11章1節で言わんとする「信仰」の内実です。この視点からカインとアベルのささげ物を見るなら、彼らのささげものに対する心の「態度」によってではないということになづけるのです。私も長い間、ささげ物に対する心の態度というレベルの解釈をしてきた者のひとりです。つまり、アベルは最上のものを神にささげたのに対し、カインのささげ物はそうではなかった。最上とは言えないもの、あるいは、宗教的な義務感によってささげたのではないかという憶測による解釈です。

●神がアベルのささげ物に目を留められたのは、そのささげ物が神のご計画と深くかかわるものであったからだと言えます。「目を留められた」と訳されたヘブル語の動詞は「シャーアー」(הִשָּׂא)で、神が驚きをもって目を留められたというニュアンスの動詞です。**つまり神の驚きとは、神がアベルのささげ物に、神ご自身がこれからなそうとされることが先取りされているのをご覧になったゆえに、驚き喜ばれたのだと解釈します。**

●使徒パウロは、「**私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます**(新共同訳は「目を注ぎます」と訳しています)。(IIコリント4章18節)と述べていますが、ここでの「見えないもの」とは、神の下さる建物(住まい)のことを意味しています。パウロはこれを「人の手によらない、天にある永遠の家」と言い換えています。パウロの信仰の望みはこの「天から与えられる住まいを着る」ことであったのです。「住まいを着る」というのはとても不思議な表現です。この表現は、おそらく、創世記3章に記されている衣、すなわちエデンの園において「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった」(創世記3:21)という神の恩寵的行為が、神のご計画を啓示していたことを暗示するような表現です。この「衣」(「クットーネット」כְּתוּנֹת、身体の一部ではなく、全体を覆う長服を意味します)を「着せる」(「ラーヴァシュ」לָבַשׁ)に象徴される「覆いの概念」の啓示が、神の歴史の中で漸次的に展開して行きます。ヨセフが着せられた長服、祭司が着る装束、幕屋、神殿、神の家、天からの住まい、救いの衣、義の衣、永遠の都・・・というように、言葉を換えながら、「覆う」という概念が神と人とが共に住むところとして展開していきます。神が建てる家の最終の目的が、私たちの肉の目では「見えないもの」であっても、それは信仰によってのみ見ることでできるものなのです。パウロはそこに「目を留める」としているのです。つまり、「目に見えない事柄に対して目を留める」ことが重要なことなのです。アベルの信仰もこのような信仰であったと理解することができます。神は、ご自身のご計画がアベルのささげ物に写し出されていたゆ

えに、「アベルとそのささげ物に目を留められた」のだと言えないでしょうか。

3. アベルのささげ物には神のご計画が示されていた

(1) ささげ物が羊であったこと

●創世記 4 章においては、「ささげ物」(「ミヌハー」 מִנְחָה)についての規定は一切記されていません。神の歴史の中でその意味することが漸次啓示されます。「ささげ物」には、「動物のいけにえ」と「穀物のささげ物」を含みます。そのことはモーセの幕屋においてより明確に啓示されます。人が人に対してする「贈り物」という意味もあります。「ミヌハー」の概念は礼拝と深く結びついており、使徒パウロは「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です」(ローマ 12:1)と述べています。つまり、神への「ささげ物」が真に意味していることは、私たちがその全存在をもって、「神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知ること」(12:2)だということです。

●ところで、アベルのささげ物が「羊」であったことは、神のご計画においてきわめて重要なことでした。ヘブル語の「セ」(הֶשֶׁ)で表される男性名詞(語尾がןでも男性名詞)の「羊」がいます(使用頻度 47 回)。実は、初子の「子羊、羊、子やぎ、やぎ」もこの語彙が使われます。初出箇所は創世記 22 章 7,8 節で、「全焼のいけにえのための羊」として登場します。また、出エジプト記 12 章 3 節と 5 節では「過越のための羊」として登場します。ちなみに、ヨハネの福音書の「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」の「小羊」は、この「セ」(הֶשֶׁ)が用いられ、イエシュアを指していることは言うまでもありません。この語に冠詞がつくと「ハツセ」(הַשֶּׁ)となり、黙示録では勝利の小羊「ト・アルニオン」(τὸ ἀρνίον)に相当します。他にも、「雄の子羊」(「ケヴェス」 כֶּבֶשׂ)、雌の子羊「(「キヴサー」 כִּבְשָׂה)という語彙があります。羊の群れ(sheep)の場合は「ツォーン」(צֹאן)という語彙になりますが、アベルのささげた羊はその羊の群れ(צֹאן)の中から選ばれた「初子」(「ベホーラー」 בְּכוֹרָה)であり、「初子」(複数)の中でも最上のも(「ヘーレヴ」 הֶלֶב、単数、「脂肪」という意味もあります)であったのです。そして、「羊」「初子」(長子)の概念の中にイエシュアが啓示されているのです。

●「羊」は、レビ記が啓示しているように、神にささげるきよい家畜であり、また食べることでできる家畜です。なぜなら、**羊は、①反芻する家畜であり、②ひづめが分かれている家畜だから**です。神に受け入れられる家畜は、この二つの条件を満たすものでなければなりません。この二つの条件を満たす動物は、「羊」の他に、「牛」と「やぎ」、そして野生の「かもしか」「鹿」の類いです。それらは神に受け入れられる動物であり、神に愛される対象でもあり、神を慕う希求の象徴でもあります。そして、いずれも神の御子「イエシュア」を啓示しています。

(2) 「反芻する」ということ

●「反芻する」のヘブル語動詞は「上る・登る」を意味する「アーラー」(עָלָה)です。その名詞は「オーラー」(עֲלָה)で、「全焼のいけにえ」を意味します。詩篇 24 篇 3 節に「だれが、主の山に登りえようか。」とありますが、これまでの歴史において、主の山(エルサレム)に登ることのできた者はアブラハム、ダビデ、そしてイエシュアです。その中で自分自身を「主の山(=エルサレム)で全焼のいけにえ」としてささげた人は、イエシュアしかおられません。

(3) 「ひづめが分かれている」ということ

●また、神にささげる動物は「ひづめが分かれている」ことが重要です。なぜなら、「ひづめが分かれる」のヘブル語動詞は「パーラス」(פָּרַס)で、「パンを裂く」という意味があるからです。最後の晩餐において、イエシュアはパンを裂いて言われました。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 26 章 26 節

また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」

●ユダヤ教によれば、アロンの祝祷は両手を前方に肩の高さで伸ばし、右図にあるような手の形(扇の形)で祝福したようです。この指の形は「ひづめが分かれた」きよい動物の「型」です。とすれば、大祭司アロンの祝祷の手の形は、まさにご自身のからだを裂いていのちを与えるイエシュアを啓示していることとなります。



●以上、「全焼のいけにえ」の立ち上る煙は、「なだめのかおり」として神を喜ばせます。イエシュアは傷なき生涯を送られて「全焼のいけにえ」(雄羊)となられた方です。またイエシュアは、「裂かれし主のからだ」と賛美でも歌われるように、「ひづめの分かれた」お方として、ご自身のからだをパンを裂くようにして与え、また罪の赦しのためにご自身の血を私たちの罪のために(一滴残らず)注ぎ出してくださいました方なのです。なぜ、神にささげるいけにえとなる動物が「反芻し、ひづめが分かれた」ものでなければならないのか。ヘブル語を知るならおのずとつなずける話なのです。

(4) 初子であったこと

●アベルのささげた羊が「初子」であったということもきわめて重要な事柄です。なぜなら、「初子」はやがて「神の所有(もの)」となることが定められているからです。

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 4 章 22 節

そのとき、あなたはパロに言わなければならない。【主】はこう仰せられる。『イスラエルはわたしの子、わたしの初子である。』

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 13 章 12~13 節

HEBREW MIDRASH No.10

12 すべて最初に生まれる者を、【主】のものとしてささげなさい。あなたの家畜から生まれる初子もみな、**雄は【主】のものである**。13 ただし、・・・あなたの子どもたちのうち、**男の初子はみな、贖わなければならない**。

●「初子」の「ベホラー」(בְּכוֹרָה)には「長子」という意味もあります。「長子」はイエシュアの称号です。御子イエシュアが肉体を持たれたのは、彼につながる兄弟たちの中で長子となるためでした。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 8章 29節

なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

4. 「正しいことを行う」とは

●創世記においては、神のご計画におけるすべての啓示が、奥義として種のように隠された状態にあり、その種の中に隠されていたものが、歴史を通して、漸次、明らかにされていきます。作家で例えるなら、その作家の生涯のテーマがすべて処女作の中に含まれているようなものです。アベルがささげた「羊」、しかもそれが「初子」で、「最上のもの(脂肪)」であったことの中に、神のご計画に抵触するものがあったのです。そのことに主ご自身が「目を留められた」のです。そこに、「これは、まさにわたしがこれからしようとしていることだ」という神の驚きを感じられます。要するに、神がなさろうとしていること、神が最も関心を抱いている事柄を知ってそこに参与すること、これが聖書の言う「**正しいことを行う**」ことではないかと考えます。神の「義」とは関係概念です。イサクが父アブラハムといつとも歩いたかかわりは、御子が御父といつとも歩かれたといつかかわりの写しです。そして、この「**ともに同じヴィジョンの実現を果たそうとするかかわり**」こそ、聖書の言うところの「愛」(「アハヴァー」 אַהֲבָה)でもあるのです。

●アベルという名前は「ヘヴェル」(הֶבֶל)で「空しい」という意味です。なぜなら、彼はカインに殺されたために、自分の子孫を残すことのできなかつた人だからです。しかし、彼がささげた信仰によるささげ物はカインよりもすぐれたものであったこと、それゆえに彼が神から義人と証明されたのです。彼は子孫を残すことはできませんでしたが、その信仰によって、今なお語っているのです。ところが、**カインの問題は、彼が神の関心である正しいことに対して全く無関心であったこと**です。それがささげ物の一件で明らかにされてしまいました。カインの怒りは、自分がささげた物に神の目が留められなかったことで心が傷つけられたことに起因しています。神がカインに対して「もし、あなたが**正しく行ったのであれば**」と、「正しいこと」に関心を向けさせようとしています。しかしカインは、その「正しいこと」が何かを神に尋ねることなく、むしろ自分の心が傷つけられたことで神を許すことができずに自分の殻に閉じこもってしまったことが、結果的に神から離れることにつながりました。

●主へのささげ物を持って来ることはすばらしい事でしたが、はからずも、それが神のご計画やみこころに関心を持つ者とそうでない者とを明確に区別することになったと言えます。「区別する」ことは神のみこころ

HEBREW MIDRASH No.10

ろです。なぜなら、創世記 1 章にあるように、神が「光とやみとを区別するようにされ、神はそれを良しとされた」からです。また、神のご計画に関心を持つ者(=神を愛する者)は、アベルがそうであったように、いつの時代でも、神のご計画に関心を持たない者から迫害を受けるのです。それゆえイエシュアは、「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」(マタイ 5:10)と約束されています。

●繰り返しますが、カインの問題はアベルのように最良のささげ物ではなく、どうでもよいものをささげたということではなく、むしろ「正しいこと」に関心を持つことなく、知ろうとせず、理解しようとしなかったところにあると考えます。カインの末裔がたとえどんなにすばらしい文明を築いたとしても、彼らは神の言われる「正しいこと」に関心を持つことなく、むしろ、「悪者たち」「神に逆らう者たち」「罪ある者たち」とされて、最終的には風に吹き飛ばされるもみ殻のように分けられ、神のご計画に参与する正しい者たちの集いに立つことができずに、永遠の滅びに定められてしまうのです。

●イエシュアが公生涯を始めるに当たって、バプテスマのヨハネのところに來られたときの会話が、以下に記されています。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 3 章 13～15 節

13 さて、イエスは、ヨハネからバプテスマを受けるために、ガリラヤからヨルダンにお着きになり、ヨハネのところに來られた。 14 しかし、ヨハネはイエスにそうさせまいとして、言った。「私こそ、あなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたが、私のところにおいでになるのですか。」 15 ところが、イエスは答えて言われた。「今はそうさせてもらいたい。このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです。」そこで、ヨハネは承知した。

●ここでイエシュアが言った「すべての正しいことを実行する」(=原文では「すべての正しいことを満たす」)とは、イエシュアがバプテスマを受けるということが、イスラエル(全人類)の罪を自ら背負うという意味であり、それは神のマスタープランにおいて必要不可欠なこととして「ふさわしい」と言っているのです。このように、主がカインに対して言われた「正しいことを行う」とはあくまでも神の目に正しいことであり、それは神のご計画全体と神のみこころ、御旨と目的の成就に抵触するものであったということです。

●「神を知るための知恵と啓示の御霊」が豊かに与えられて、そのことに私たちの霊の目が開かれることは、使徒パウロのように、「御国の福音」を余すところなく宣べ伝えることにつながります(使徒 20:27)。イエシュアは「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかし(証言)され、それから、終わりの日が來ます。」(マタイ 24:14)と語っています。別訳は、「また、この御国の福音は、すべての国民への証言として全世界で宣べ伝えられます。そして、それから終わりがやってきます。」です。ここでの「終わりの日」とは「ヤコブの苦難」と呼ばれる未曾有の大患難を意味しますが、そのことを通して神の民であるイスラエルが世界中から集められ、そしてキリストが再臨します。神のマスタープランにおける「御国の福音」をより深く理解しつつ、鳥瞰的な神のご計画の全体をいつでも、どこでも、余すところなく(=ひるむこ

となく、尻込みすることなく、避けることなく)宣べ伝えることに専心できるよう、祈りたいと思います。

ベ・アハリート

●最後に、以下の二つの設問に対する答えに加えて、もう一つの設問とその答えを簡潔に記したいと思います。

第一の設問 なにゆえに神はアベルとそのささげ物に目を留められたのか。

それは、神がアベルのささげ物に、神ご自身がこれからなそうとされることが先取りされているのをご覧になったからです。

第二の設問 「正しいことを行う」とはどういうことか。

それは、あくまでも神の目に正しいことであり、それは神のご計画全体と神のみこころ、御旨と目的の成就に自ら参与することです。

第三の設問 次世代に対して、この聖書箇所からどのようなメッセージをすべきか。

それは、第一と第二の設問の答えから明らかです。神の関心事に目を向けさせることです。それは具体的に、神のご計画の全体(マスタープラン)を知らせることです。創世記4章には、人類最初の殺人が記されています。カインは神が目を留められたことに全く無関心であったことで、彼の心の中に暗やみの力である「ねたみ」を招き、それに支配されてしまいました。聖書を通して神のご計画全体を知り、それを信じることは、次世代の信仰者に新しいぶどう酒と新しい皮袋を備えさせることになると信じます。